

中国人日本語学習者による日本語オノマトペの使用実態と産出傾向

—ベトナム人日本語学習者との比較—

グエン ティ タイン トウイ

要旨

日本語オノマトペが日本語学習者にとって習得が難しいことは、多くの先行研究で既に指摘されているが、学習者が日本語のオノマトペをどの程度使用できているかについて実証した研究は限られる。そこで、本研究では、独自に制作したアニメーション映像を材料に、ベトナム人日本語学習者の当該のデータと比較をしながら、中国人日本語学習者がどの程度、日本語オノマトペを適切に使用できているかを明らかにする調査を行い、オノマトペの産出傾向を検討した。その結果、母語でのオノマトペ使用が少ない中国人日本語学習者による日本語オノマトペの正答率が、母語でのオノマトペ使用が多いベトナム人日本語学習者より低いこと、しかし、当該のオノマトペが未知の場合には、反復造語法や物事の状態を擬音的に捉え、オノマトペを産出するという点で、ベトナム人日本語学習者と同様傾向が見られることがわかった。

キーワード：オノマトペ、擬音語・擬態語、中国人学習者、ベトナム人学習者、反復造語法

1. はじめに

日本語にはオノマトペと呼ばれる語群が豊富に存在し、日本語母語話者の言語生活に不可欠な要素となっている。しかし、これらの言葉は感覚的で、日本語教育において重視されていない現状があるため、外国人日本語学習者（以降、学習者と呼ぶ）にとって難しいことがしばしば指摘されている（張 1989、金 1989、彭 2007、有賀 2007）。一方、学習者が実際に日本語オノマトペをどの程度使用できているかという実証研究はまだ限られている現状がある。

そこで、本研究では、独自に制作したアニメーション映像を材料に、①中国人日本語学習者（以降、中国人学習者と呼ぶ）がどの程度、日本語オノマトペを適切に使用できているか、②未知のオノマトペを産出する際に、どのような傾向がみられるかを、ベトナム人日本語学習者（以降、ベトナム人学習者と呼ぶ）と比較をしながら明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

学習者が実際に日本語オノマトペをどの程度使用できているかという実証研究はまだ限られているが、参考となる先行研究として、中石ほか（2011）、吉永（2011）、吉永（2017）、グエン（2018）が挙げられる。

中石ほか（2011）は、二つの課題を実施し、中国人学習者が日本語のオノマトペをどのくらい使用できるかを調べたものである。一つ目の課題はアニメーションにより使用文脈を呈示してオノマトペの使用を誘出する産出課題で、二つ目の課題はオノマトペを呈示して使用文脈を想起できるかを探る作文課題である。二つの課題では同一の 39 語のオノマトペを実験材料としている。対象は日本に在住している中国語を母語とする上級日本語学習者 10 人で、統制群として、母語話者の 22 人にアニメーション課題を実施している。その結果、上級学習者で日本に住んでいるにもかかわらず

ず、いずれの課題も中国語母語話者の正答率が低く（平均 24.4%）、オノマトペの習得の難しさが改めて裏付けられている。一方で、多くの誤用があったことが述べられているが、その誤用の原因は明らかにされていない。貴重な研究ではあるが、データが日本在住の中国語を母語とする日本語学習者 10 名に限られており、人数を増やし、学習者のレベルをそろえる必要がある。また、オノマトペは日常生活で学ぶことが多いため、調査協力者の日本での生活におけるオノマトペの使用状況も検討する必要があるだろう。

吉永（2011）は、初級、中級、上級の中国語母語話者を対象に擬態語を含む心身表現の誤用を調べたもので、誤用が多く、上級者でも様々な誤用が見られたという。これらの原因は、両言語の心身表現の対応の複雑さ、人称制限や格助詞、品詞などの表現差によるものと考察されている。

吉永（2017）は、「ずきずきする」「ぺこぺこだ」のような心身の状況を表す擬態語を調査材料とし、在中国の中国語母語話者（上級 23 名、中級 22 名、初級 29 名）を対象とした 3 種類のアンケートをもとに習得状況について考察したものである。その中のアンケート①では擬態語文の文末「だ／する」を選択させる。アンケート②では、違う被験者に対し、アンケート①にある擬態語を用い、文を作成させる。その結果、文末選択の課題（アンケート①）で誤用率の高いものは作文課題（アンケート②）でも誤用率が高いことが明らかにされている。この誤用傾向から、擬態語の習得と品詞分類の知識の関連が推測され、誤用を減らすためには語彙導入時の品詞の理解も必要であると提案されている。一方、アンケート③では、特定部位に対応する擬態語を選択する部分作文を実施した。その結果、アンケート②で正答率が低いものとアンケート③で正答率の低いものがおおよそ一致し、関連性が見られた。このように、吉永（2011）と吉永（2017）によって、中国人学習者の日本語オノマトペの使用において多くの誤用が見られるということが確認された。しかし、日本語オノマトペは特別な語群であり、動詞・形容詞・名詞・副詞としての用法など、様々な用法で使うことができるため、これらの誤用は、単に品詞分類の知識がないと言い切ることは難しい。そして、当該のオノマトペを知っているかどうか、オノマトペをどう学習しているかという内容がわからない限り、学習者の習得状況は考察しきれない面がある。

グエン（2018）では、日本人の日常生活に頻出する日本語オノマトペを材料に、独自のアニメーションを制作し、ベトナム人学習者の日本語オノマトペの使用実態と産出傾向を考察した。その結果、ベトナム人学習者の平均正答率は 45.7% であり、当該のオノマトペがわからない場合に、知っている語の語基を反復したり、物事の状態を擬音的に捉えて産出したりする傾向が見られた。グエン（2017）では、ベトナム語にはオノマトペが数多く存在し、日常生活で頻繁に使用されているため、オノマトペに対する親しみが有り、日本語を学習していく上での強みを持っていることが述べられている。

こうした先行研究から、中国人学習者は日本語オノマトペがあまり使用できていないことがわかった。その要因として、中国語にはオノマトペ（特に擬態語）が少ないこと、中国語では擬態語によって様々な状況を表現し分ける言語習慣がないこと（吉永 2017）が考えられる。

本研究は、母語にオノマトペが豊富に存在しているベトナム語の母語とするベトナム人学習者の当該のデータと比較をしながら、母語にオノマトペが少ない中国語を母語とする中国人学習者による日本語オノマトペの使用実態を改めて確認した上で、中国人学習者が産出した語にどのような傾向が見られるかを調査し、中国人学習者の日本語オノマトペの教育に有益な示唆を得ることを目指したい。

3. 本研究におけるオノマトペの範囲

オノマトペと一口に言っても、研究者によって見解に微妙なずれが見られ、判断基準は必ずしも一定してはいない。また、先行研究においても、取り扱われているオノマトペの範囲は様々である。

そこで、本研究では、オノマトペの判断基準として、浅野・金田一（1978）、飛田・浅田（2002）、山口（2003）、小野（2007）の四つを選択した。この4冊のうち、2冊以上の辞典に記載されている語をオノマトペとして取り扱う。また、正確を期すため、今回選定した語は、日本語教育学を専攻する日本語母語話者7名により、4名以上に認定された語をオノマトペとしている。そのため、「ちゃんと」「どンドン」など、一般に副詞と思われそうな語も調査対象となる。

4. 調査概要

4.1 調査材料

グエン（2018）と同じ調査材料を用いる。具体的には、日本人の日常会話に頻出する21語のオノマトペを選び出し、その21のオノマトペを用いた例文と、その例文の場面を描写した独自のアニメーションを制作した。アニメーションは、調査対象である21語のオノマトペに対応する21シーンが描かれたもので、上映時間は10分34秒である。各シーンに、当該オノマトペの描写文が画面下に字幕として表示される。調査協力者に配布する「回答用紙」には、画面に表示される描写文が書かれている。

以下の表1では、今回の調査材料となる21語のオノマトペとその描写文である。

表1 日常生活に頻出する21語のオノマトペとその描写文

順番	オノマトペ	描写文
1	くるくる	風車（かざぐるま）が風で_____回っている。
2	うろうろ	今日は学校が早く終わって、することなかったので、学校の前を_____していた。
3	がんがん	昨日はお酒を飲みすぎたせいで、頭が_____する。
4	ほっ（と）	難しい仕事を無事に終えて、_____と一息ついた。
5	ぐっ（と）	名曲（めいきょく）を聞いていて、_____と心に来た。
6	あっさり	日本料理は油をあまり使わず、_____していて体にいい。
7	ぐるぐる	目が_____回る。
8	さらさら	彼女はかみの毛が_____で、きれいだ。
9	すっ（と）	{電車の中で} 若者が_____と立って、お年寄りに席を譲（ゆず）った。
10	たっぷり	お昼は野菜_____のカレーを食べた。
11	ちゃん（と）	子供は、歯磨きが_____とできたね、とママに褒（ほ）められて喜（よろこ）んだ。
12	どンドン	お母さんのおなか_____大きくなってきた。
13	にこにこ	この子はいつも_____している。
14	ばたばた	最近の仕事がとても忙しくて、_____している。
15	ぱっ（と）	友達と話している時に、_____といいアイデアが思い浮かんだ。
16	ばらばら	ロボットの体が_____になっている。
17	ぴかぴか	くつを_____に磨（みが）いた。

順番	オノマトペ	描写文
18	ぴったり	このくつはサイズが_____だ。
19	ふ(と)	夜道を一人とぼとぼ歩いていた。_____と空を見上げると、お月様が私に笑いかけてくれ、元気が出た。
20	ふらふら	道で酔(よ)っぱらった人が_____歩いている。
21	ぼうっ(と)	今日は寝不足で頭が_____としていて集中できない。

アニメーションの画像は次のようなもので、右肩の数字は画像が静止してからの秒数である。



図1 アニメーション画面のキャプチャの例

4.2 調査協力者

調査協力者は中国にある某大学の日本語学科の3年生20名で、大学に入ってから日本語を勉強しはじめた。全員、日本語能力試験N2資格を有し、日本留学経験なしである。調査者IDはC1からC20までとする。

統制群として、日本語母語話者20名に対してオノマトペ使用調査を実施した。日本語母語話者による日本語オノマトペの使用の平均像を知るため、統制群である日本語母語話者の出身・年齢(19歳~69歳)・職種(銀行員、会社員、主婦、大学生、大学院生など)に多様性を持たせた。

4.3 調査手続き

調査は以下の2つのステップからなる。そのうち、統制群である母語話者にはステップ1のみ協力してもらった。

【ステップ1】

回答用紙を配って、アニメーションを上映する。21シーンのアニメーションを順に見て、各例文が完全に映し出された後、15秒の間で画面の描写としてふさわしいオノマトペを回答用紙に記入する。正確にわからない場合は、自分なりのオノマトペを産出してもらおう。どうしても思いつかない場合はそのまま無回答にしてもよいという指示を出した。アニメーションの上映が終了したら、すぐに回答用紙を回収する。

【ステップ2】

休憩した後、日本語学習歴や日本語オノマトペの使用状況、学習方法に関するフェイスシートに記入してもらう。

母語話者に対する調査は個別に静かな個室で行った。中国語母語話者に対しては、私語を許さない条件下で大学の大教室で実施した。調査の所要時間は 30 分前後であった。

5. 結果と考察

5.1 母語話者の答えと正答の基準

本調査が対象とした 21 語のオノマトペを再現するアニメーションは、当該の語を忠実に再現できるよう、日本語母語話者を対象にパイロット調査を 3 度行い、修正に努めた¹。それでも、本調査の結果、シーンによっては回答が割れるものがあり、母語話者であっても、筆者の意図した通りの回答が得られるとは限らないことがわかった²。そこで、母語話者が記入した回答の中で、本研究で設けられた条件を満たすオノマトペはすべて正答と認め、学習者が同じ回答をした場合に正答と判断した³。また、学習者の出した回答が母語話者の回答になくても、日本語教育専攻の母語話者がふさわしいと判断したものも正答とした。解答用紙に何も書いていない場合は「無回答」とする。正答と「無回答」以外の答えに「産出」というラベルを貼った。また、調査のステップ 2 の中に、調査対象である 21 語のそれぞれに「知っているますか」という質問の項目があり、それに「知っている」と回答した場合に「既知」と判断した。

5.2 中国人学習者が日本語オノマトペがどの程度使用できているか

次ページの表 2 は中国人学習者の回答結果（正答率・既知率・無回答率）をまとめたもので、順位は正答率の高い順となっている。

表 2 からわかるように、中国人学習者の平均正答率は 29% であった。

既に述べたように、中石ほか（2011）は中国語を母語とする上級日本語学習者を対象に、アニメーションで使用文脈を呈示してオノマトペの使用を誘出する実験を行った結果、平均正答率が 24.4% であった。中石ほか（2011）の研究と本研究で取り扱っているオノマトペ項目は一致しているわけではないが、どちらも日常生活に頻繁に出てくるオノマトペである。本研究の調査対象者は全員日本語能力試験 N2 資格を有しているということは「日常的な場面で使われる日本語の理解に

¹ 統制群として調査に協力した 20 名の母語話者には、パイロット調査の協力者は含まれていない。

² 各アニメーションのシーンにおいて、日本語母語話者が出した同じ回答の割合の平均が 70% を超え、一致率が高いことがわかった。

³ 母語話者が出した正答とみられるものは以下の通りである。そのうち、太字で書いてあるのが調査対象の 21 語のオノマトペで、() の中で書いてあるのが調査対象の 21 語のオノマトペと異なるが、正答とした回答である。くるくる (ぐるぐる、ゆったり) うろうろ (ぶらぶら、うろちょろ、ゆったり) **がんがん** (ずきずき、きんきん、ぐらぐら) **ほっ** (は一つと、やれやれ) **ぐっと** (じーん) **あっさり** (さっぱり、さらっと) **ぐるぐる** (くるくる) **さらさら** (つやつや) **すっ** (さっ、ささっ、ぱっ) **たっぷり** (もりもり、どっさり) **ちゃん** (きちん、ぼっちり、ごしごし) **どんどん** (だんだん) **にこにこ**、**ばたばた** (いらいら、せかせか、ぐったり) **ぽっと** (ぴん、ふ) **ばらばら**、**ぴかぴか**、**ぴったり** (きちきち) **ふ** (ぱっ、ひょい) **ふらふら**、**ぼうっ** (くらくら、ぐらぐら)

加え、より幅広い場面で使われる日本語をある程度理解することができる」はずである⁴。にもかかわらず、日常生活に頻出するオノマトペを適切に使用できている日本語能力上級レベルの中国人学習者の割合は3割に達していない。一方、グエン（2018）では、日本語学習歴と日本語能力が同等のベトナム人学習者3年生に対し、同じ調査材料を用いて調査した結果、正答率が55.1%であった。このことから、中国人学習者にとって日本語オノマトペの習得が難しいことが裏付けられたと思われる。

表2 中国人学習者の正答率・既知率・無回答率（%）

順位	オノマトペ	正答率	既知率	無回答率	順位	オノマトペ	正答率	既知率	無回答率
1	にこにこ	70	100	15	12	ちゃんと	25	100	50
2	どんどん	65	100	5	13	さらさら (ふわふわ)	20	20	30
3	ぴったり	55	95	25	14	ぼうっと (ぼんやり)	20	10	65
4	がんがん	40	80	50	15	たっぷり	15	100	40
5	あっさり (さっぱり)	40	45	55	16	ぴかぴか	15	100	55
6	ばらばら	40	100	40	17	ばたばた (いらいら)	10	20	30
7	うろろう (ぶらぶら)	35	30	40	18	すっと (さっと)	5	10	45
8	ぐるぐる (くるくる)	35	65	50	19	ぱっと (ぴんと)	5	10	55
9	ふらふら (よろよろ)	35	70	45	20	ふと	5	5	45
10	くるくる	25	10	55	21	ぐっと (じーんと)	0	35	40
11	ほっ (と)	25	45	55		平均	27.9	54.8	42.4

全体的に見て、正答率が比較的高い（40%以上）のは、「にこにこ」「どんどん」「ぴったり」「がんがん」「ばらばら」というオノマトペである。これらの語は既知率が80%以上で高く、しかも、使い方がはっきりしているため、学習者の正答率が高いのは容易に想像がつく。

正答率がやや高いのは、「あっさり」（40%）、「うろろう」（35%）、「ぐるぐる」（35%）「ふらふら」（35%）というオノマトペであるが、回答の内訳を見ると、筆者がもともと意図していた21語のオノマトペとずれるものが混ざっていたため、筆者が意図していた語と同じ回答をした中国人学習者が必ずしも多いわけではなかった。

オノマトペの正答率と既知率の関係であるが、全体に正答率より既知率のほうが高い。これは、それぞれのシーンの静止時間が15秒であるということが影響している可能性もあるが、あるオノマトペの意味を既に勉強して知っていても、実際の場面にすぐに思いついて使用することの難しさを示している。

「くるくる」「ほっと」「さらさら」「ぼうっと」「ばたばた」「すっと」「ぱっと」「ふと」「ぐっと」というオノマトペは全体的に見て、正答率が下位にあるが、これらの語は既知率が低いため、正答率が下位にあるのは自然である。

⁴ 国際交流基金が定めている日本語能力の認定の目安

しかし、既知率が100%であるにもかかわらず、正答率が非常に低いオノマトペが見られる。具体的には、「ちゃんと (25%)」「たっぷり (15%)」「ぴかぴか (15%)」である。なぜだろうか。「ちゃんと」と「たっぷり」の場合であるが、おそらく、一般に副詞に思われる語であり、オノマトペとして考えづらいため回答として挙げなかったと思われる。この傾向はベトナム人学習者にも共通に観察されている。「ぴかぴか」の場合、日本語でなく母語の中国語で描写させた、筆者が別に行った調査では、「きれいに」「丁寧に」に相当する中国語の表現を使用し描写することが多かった。このように、中国語では「くつをぴかぴかに磨く」の言い方はあまりしないようである。つまり、中国人学習者は、「くつをぴかぴかに磨く」という言い方に馴染みがないため、「ぴかぴか」を知っていても、回答として挙げなかったと考えられる。

このように、中国人学習者による日本語オノマトペの正答率 (27.9%) は、日本語レベルで同等のベトナム人学習者の (55.1%) に比べ低いことが明らかになったが、これは、中国人学習者の日本語オノマトペに対する意識と関係があるのだろうか。

オノマトペを含む外国語の運用力は練習すれば練習するほど高くなるものである。調査のステップ 2 で、中国人学習者の日本語オノマトペの使用状況と学習方法などについて尋ねたところ、「日本語オノマトペはおもしろいと思いますか」という質問に対して、「強くそう思う」と回答した人が10%しかなく、「ややそう思う」の回答者が60%で、「あまり思わない」の回答者が20%で、残りの10%は「まったくそう思わない」との回答であった。つまり、中国人学習者のうち、日本語オノマトペをおもしろく感じているのは一部であることがわかる。また、「日本人と日本語で話す時に、できるだけ日本語オノマトペを使おうと思っていますか。」の質問に対しては、「できるだけ」という回答がなく、「時々」と答えた学習者が15%である一方、「あまり使っていない」が70%で、残りの15%の学習者は「全然使わない」という回答であった。つまり、日本語オノマトペの運用に関しても、中国人学習者は運用には積極的ではないことがわかる。このように、中国人学習者の場合、日本語オノマトペに対する興味とその学習意識が必ずしも高くないことが明らかになった。これに対して、ベトナム人学習者は全員、日本語オノマトペをおもしろいと感じていると答えている。また、「日本人と日本語で話す時に、できるだけ日本語オノマトペを使おうと思っていますか。」の質問に対して、「できるだけ」と回答した人が20.8%で、「時々」と回答した人が25%であった。つまり、ベトナム人学習者の半分弱が日本人と会話する時に、日本語オノマトペを使う傾向にあるということである。このように、日本語オノマトペに対する興味と運用意識が、正答率に直接影響を与えた要因として考えられよう。

最後に、中国人学習者の無回答率を見る。表 2 からわかるように、中国人学習者の無回答率は44%である。ベトナム人学習者3年生の無回答率が12.8%であることと比較すると、ベトナム人学習者のほうが、無回答率が少ないことがわかる。これも上述の要因を反映していると考えられる。

5.3 中国人学習者が産出した語に見られる傾向

【知っている語の語基を反復させ造語する】

ベトナム人学習者と同様に、中国人学習者の回答の中には、知っている語の語基を反復させてオノマトペを造語する例が見られた。ここでは、一部の例を取り上げ説明する。

例えば、「風車 (かざぐるま) が風で_____回っている。」の例では、正答は「くるくる」であるが、回答として「まるまる」と答えた中国人学習者が2名いた (C4, C15)。この場合、正答を知らないかすぐに思いつかないため、画像から「丸 (まる) い」という形をイメージし、その語基で

ある「まる」の部分を反復させ、「まるまる」の産出に至ったのではないかと思われる。同じく、「まわまわ」と回答したのは1名(C1)であるが、これは「回(まわ)る」という描写文の中にある動詞の語基の反復形から造語されたものだと思われる。ちなみに、ベトナム人学習者のグループにおいても同様に「まるまる」「まわまわ」の産出例が見られた。

同じく「くつを_____に磨(みが)いた。」の例であるが、正答は「ぴかぴか」である。正答を出せなかった2名の学習者は、「靴がきれいにみがいた」ことを画像から理解し、「きれ」という部分を反復させ「きれきれ」という語を産出していた。(C12、C18)。ベトナム人学習者のグループにおいても同じ回答が6例見られた。

このように、中国人学習者も、ベトナム人学習者と同様に、当該の日本語オノマトペがわからない場合、知っている言葉を連想し、その言葉の語基の部分を反復させ、ABAB型の日本語オノマトペを産出している。確かに中国語におけるオノマトペは、ABAB型のものも存在するが、先に言及した母語である中国語を対象にした調査では、中国語のAABB型のオノマトペのほうが圧倒的であった。そのため、このようなABAB型の日本語オノマトペの産出は、ベトナム人学習者と同様に、日本語がある程度できるようになると、日本語オノマトペの語感が身につく、日本語オノマトペの典型的な造語法が自然に習得できていることを示唆している。

【物事の状態を擬音的に捉え造語する】

グエン(2018)では、ベトナム人学習者は当該の日本語オノマトペがわからない場合、物事の状態を擬音的に捉えオノマトペを造語する傾向が見られたが、中国人学習者にも同じような傾向が観察された。ここでは、一部の例を取り上げて説明する。

例えば、「難しい仕事を無事に終えて、_____と一息ついた。」の例であるが、正答は「ほっ」というオノマトペである。中国人学習者の回答の中には、「ふう」という回答が2例(C6、C7)、「ふうふう」という回答が2例(C8、C9)見られた。フォローアップインタビューを実施できなかったため、正確な産出経緯は断定できないが、おそらく、ため息をする時の音を模倣して産出したのではないかと思われる。

同じく、「くつを_____に磨(みが)いた。」の例では、正答は「ぴかぴか」であるが、「さあさあ」という産出が1例見られた(C19)。これは、おそらくくつを磨くとき、ブラシと靴の表面が触れて発する音を模倣して造語したのではないかと思われる。

上記のように、当該のオノマトペがわからない場合、中国人学習者も、ベトナム人学習者と同様に物事の状態を擬音的に捉え、オノマトペの産出にチャレンジする姿が見受けられた。

6. まとめと今後の課題

以上、日本語母語話者の日常生活に頻出する21語のオノマトペを誘出する独自に制作したアニメーションを用い、中国国内の大学の日本語学科の学部3年生の中国人学習者を対象に、オノマトペの使用と産出傾向を見るための調査を行った。

その結果、中国人学習者の正答率は27.9%で、日本語レベル同様のベトナム人学習者の正答率の55.1%に比べ遥かに低いことがわかった。中国人学習者の日本語オノマトペの正答率が低いことは、中石ほか(2011)をはじめ、先行研究の調査結果と一致している。この要因に関して、中国語にはオノマトペが少ない、中国語では擬態語によって様々な状況を表現し分ける言語習慣がないという先行研究が述べている要因のほかに、調査のステップ2で明らかになった中国人学習者は日本語オ

ノマトペに対する興味と学習意識が高くないことが考えられる。このため、中国人学習者に日本語オノマトペを導入する際には、同じ場面を描写する表現として、オノマトペが使われているのとオノマトペが使われていない表現を両方提供し、その表現効果を比較させるなどの方法を用い、日本語オノマトペの表現効果と面白さを実感させることにより、日本語オノマトペに対する興味と学習意識が高まるのではないかと思われる。

一方、当該のオノマトペがわからず、オノマトペを産出しなければならない場合には、知っている語の語基を反復させたり物事の状態を擬音的に捉えたりして、日本語オノマトペの典型的な形態である ABAB 型の語を産出し、ベトナム人学習者と同様の傾向が観察された。このように、当該の日本語オノマトペがわからない場合、母語にオノマトペが豊富に存在するベトナム語の母語話者も、母語にオノマトペが少ない中国語母語話者も同じ方法を援用し、新しい日本語オノマトペを産出していったことが判明した。つまり、学習者は、日本語がある程度できるようになると、日本語オノマトペの語感が身につく、音を模倣して物事の状態を描写するという擬音語の造語法を自然に習得していると言えるだろう。日本語教育への応用を考えると、「いらいら」のような、既存の言葉の語基の反復によりできたオノマトペを導入する際に、元の語基も導入し、「いらつく」や「いらっとする」も同時に扱えば、その意味をより印象的に習得することが可能になるだろうし、擬音語のような実際の音に由来するオノマトペを導入する場合は、アニメーションなどの上映で、その音を体感してもらうことで、オノマトペを感覚として理解し、覚える方法が効果的であろう。

今後は、中国語におけるオノマトペの使用実態を調査し、日本語オノマトペを学習する中で、母語の干渉があるかどうか、ある場合はどのように表現されるのかを調査するとともに、中国人学習者に試験的に日本語オノマトペを導入し、縦断調査でその効果を検討し、中国人学習者のための効果的な教授法を検討する必要がある。

参考文献

- 浅野鶴子(編)・金田一春彦解説(1978)『擬音語・擬態語辞典』角川書店
- 有賀千賀子(2007)「オノマトペを通じて、語彙の学習・教育について考える」『日本語学』26-7、pp.65-73
明治書院
- 小野正弘(2007)『日本語オノマトペ辞典:擬音語擬態語 4500』小学館
- 金慕箴(1989)「中国における日本語の擬音語擬態語教育について」『日本語教育』68、pp.83-98、日本語教育学会
- グエン・ティ・タイン・トゥイ(2017)「日本語オノマトペの習得におけるベトナム語母語話者の強」『一橋大学国際教育センター紀要』8、pp.69-80、一橋大学国際教育センター
- グエン・ティ・タイン・トゥイ(2018 掲載予定)「ベトナム人日本語学習者による日本語オノマトペの使用実態と産出傾向」『日本語/日本語教育研究会誌』9、ココ出版(ページ未定)
- 張麗群(1989)「中国人から見た日本語の擬音語と擬態語」『日本語教育』68、pp.128-130、日本語教育学会
- 中石ゆうこ、佐治伸郎、今井むつみ、酒井弘(2011)「中国語を母語とする学習者は日本語のオノマトペをどの程度利用できるのか:アニメーションを用いた産出実験を中心として」『中国語話者のための日本語教育研究』、pp.42-58 日中言語文化出版社
- 彭飛(2007)「ノンネティブから見た日本語のオノマトペの特徴」『日本語学』26-7、pp.48-56 明治書院
- 飛田良文・浅田秀子(2002)『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版

山口仲美 (2003) 『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』 講談社

吉永尚 (2011) 「中国語話者における心身表現上の母語干渉について」『園田学園女子大学論文』 45、
pp.167-180、園田学園女子大学

吉永尚 (2017) 「心身の状況を表す擬態語の習得についての考察—中国語母語話者の作文データをもとに—」『園田学園女子大学論文集』 51、pp. 93-103、園田学園女子大学